

心房細動 — 入院記録

1 最初の発症 — 岡山にて（2021年4～5月）

最初にそれが起こったのは、岡山の和気町体育館だった。

まさか自分の身に、心臓に関わる病気が起こるとは思ってもいなかった。

そういえば50代の頃、会社の健康診断で心電図に異常が出たことがある。

精密検査の結果は「様子見」。その後も山登りには変わらず参加していた。

岡山に引っ越したのが2015年。

田舎での畠仕事も始め、静かな暮らしをすっかり日常になっていた。

そんな60代後半のある日——入院を伴う出来事が三度起きた。

そのうちの一つが「心房細動」だった。

いつものように体育館のトレーニングルームで運動していた。

ランニングマシンを30分、自転車を30分、そして筋トレ。合計1時間半ほど。

自転車のハンドルには脈拍が表示される。

軽く漕ぐと80くらい、負荷をかけても100くらいがいつものパターンだ。

ところがその日は、脈がバラバラに表示された。

気分が悪いわけではないが、さすがに不安になった。

指導員の古川さんに相談すると、

「すぐに病院へ行きましょう」とのこと。

そのまま、かかりつけの大田原医院に直行した。

田舎では数少ない病院だが、すぐに紹介状を書いてくれた。

紹介先は「心臓病センター榎原病院」。

2021年5月、ここでカテーテルによる焼灼術を受けた。

（不規則な信号を出す心筋を焼いて、心臓のリズムを戻す手術である。）

術後の経過は順調。

再び山登りを楽しみ、炎天下での畠仕事も再開できた。

その後2年ほど経って、尾張旭へ戻った。

2 再発 — Apple Watchが鳴った日（2025年7月24日）

2025年7月24日木曜日、12時半ごろ。

尾張旭の自宅でApple Watchが突然鳴った。

手首に不穏な振動が伝わる。

(最初の手術のあと、登山中に使えるスマートウォッチとして購入していた。)

まさか心房細動検出機能が役立つとは思わなかった。)

だが愛知に戻ってから、循環器科には一度もかかっていない。

どこへ行けばいいか分からぬ。

そんなとき、元看護師の妻の一言。

「労災病院に電話してみたら？時間外でも診てくれるかも。」

言われるまま電話すると、専門医はいないが診察してくれるとのこと。

すぐに受診した。救急外来で心電図を取ると、

「心房細動らしいですね」と言われた。

薬の処方はなく、翌日の循環器科受診を勧められた。

3 診断確定 — 労災病院から大学病院へ

翌日、7月25日金曜日。

循環器科の玉井希医師を受診した。

病院では科ごとに初診扱いになるらしく、

ここでもお決まりの「問診表」記入。

本人と家族の病歴欄を、見えづらい目で汚い字で書いた。

(すでに眼科・消化器内科・泌尿器科を受診中。毎回同じことを書くのは何とかならないものか。)

検査はフルコース。血液検査、尿検査、レントゲン、心電図、心エコー。

心房細動の診断は確定したが、不整脈専門の医師に診てもらうことになった。

そして、週に一度旭労災に来ている名古屋市立大学病院の専門医、

桜井勇明医師の外来を紹介された。

4 専門医との再会 — 再手術を決意(7月29日)

7月29日火曜日。旭労災病院・不整脈外来。

桜井勇明医師の診察を受けた。

心房細動の病名は確定したが、原因やきっかけははっきりしないという。

一度始まると自然には戻らない、との説明もあった。

ただ、発症時刻だけは明確だった。

Apple Watchがきっちり知らせてくれたのだ。

桜井先生もその正確さに少し驚いていた様子だった。

最初の手術がうまくいった経験もあり、私は早期の再手術を希望した。

紹介された候補は、愛知医大・陶生病院・徳洲会・名古屋市立大学病院。

術後の外来通院を考え、桜井先生のいる名市大病院で受けることに決めた。

5 名古屋市立大学病院での初診（8月13日）

8月13日11時。名古屋市立大学病院で初診。

地下鉄桜山駅から少し歩くが、公共交通で行けるのがありがたい。

栄で瀬戸電から地下鉄に乗り換える途中、

久屋大通のセントラルパーク地下街を歩いた。

知らないうちにテレビ塔の北側がすっかり変わっていて、

成城石井や新しい飲食店が並んでいた。

病院に着くと、増築中であるで迷路。

受付を探して歩き回り、ようやく玄関にたどり着いた。

初診の手続きでは、またもや問診表記入。

視野欠損のある目で、曲がりくねった字を書く。

「マイナ保険証で投薬履歴は見られる」というが、

家族や本人の病歴はどこまで共有されているのだろうか。

どうも病院間の連携はまだ発展途上のようだ。

この日も、心電図・レントゲン・血液検査など、

労災で受けたのと同じ検査を再び受けた。

医師は同じでも病院が違うと、データは引き継がれないらしい。

朝9時に出て、帰宅は17時近く。丸一日の仕事だった。

6 入院前検査—教材になった心臓（8月29日）

当初の予定では、8月29日が入院日だった。

入院して土日を挟み、9月1日（月）に手術という段取り。

だが、無為に二日間ベッドの上で過ごすのもどうかと思い、

前日（8月31日）入院に変更してもらった。

この判断が良かったのかどうかは、まだ分からない。

この日は入院前の検査日。

心臓超音波検査、CT、X線、心電図、血液検査と盛りだくさん。

大学病院らしい光景もあった。

心工コーの最中、教授らしき医師と学生が4~5人ぞろぞろと入ってきた。

私の心臓の画像を見ながら、あれこれ議論している。

(どうやら私の心臓は、教材として役立っているらしい。)

事前に同意はしていたが、

「見学させていただき、ありがとうございました」くらいの一言があってもよさそうなものだ。

まあ、未来の医師たちの役に立ったなら、それで良しとしよう。

帰宅は18時前。長い一日だった。

7 入院 — 病院の食事は多すぎる(8月31日)

8月31日13時、入院。

入院初日の夕食でまず驚いた。ご飯が「200グラム」。

多い！

普段から摂めにしている身には、かなりのボリュームだ。

(食事が完食できないことに、微妙な罪悪感を覚えるのはなぜだろう。)



8 手術の日 — 時間の感覚(9月1日・月曜日)

手術は9時から13時半ごろまで。

全身麻酔だったため、術中の記憶はまったくない。

気がつくと病室。

待っていた妻と再会した。

私にとっては一瞬だったが、妻には長い4時間だったらしい。

手術は成功。心臓のリズムは正常に戻った。

夕方には体が自由になったが、点滴と尿の管、心電図の電極はついたまま。

夕食は箸を持つ気にもなれなかった。

9(9月2日)二日目—個室の夜景と長い夜

翌2日、点滴と尿の管が外れ、身軽になった。
喉の痛みはあったが、他に痛みはなく、
日中はうとうとしながらベッドで過ごした。
午後、同室の三人が退院または移室して、
私は一時的に個室状態になった。
14階から眺める夜景は見事。
磨き上げられた窓越しに広がる光が、静かに心に染みた。
夜は長かった。
点滴の影響か、何度もトイレに立った。
しかし静かな病室で過ごす夜は、妙に心地よかったです。



10 人間観察—病室の音楽隊(9月2日夜)

その静けさも束の間。
夜になると、新たに三人の患者が入室して満室となった。
そこからが、「人間観察」の始まりである。

a いびきの人

入眠後しばらくして、いびきがだんだん大きくなつた。
隣の人は耐えきれず、部屋の外へ退避。
私は山小屋経験者の意地で耐えた。1時間後、
その人が寝返りを打つ瞬間、音がピタリと止まつた。
朝まで静か。助かつた。

b ナツツの人向かいのベッドの人は、どうやらナツツ好き。

食事前から「ポキポキ」「カリカリ」、
食後も「ポリポリ」「ボリボリ」。
消灯10分前まで続いた。
歯は丈夫そうだが、磨かないで寝るのだろうか?
他人事ながら心配になつた。

c 爪切りの人(?)

横のベッドの人は長めの入院らしく、また同じ部屋に戻ってきた。
夜、消灯前になると「カチカチ」と爪を切るような音が延々と続く。

足と手を全部切っても20本しかないはずだが、
一向に終わらない。
(翌日、看護師と話している声を聞いて判明。
どうやら英語教材の“トーエンエック”を使っていたらしい。)
夜は病室全体が静かになったかと思えば、
誰かのナースコール、点滴交換、尿管の取り外し。
小さな騒動が連続する。
私はほぼ自由の身。携帯以外やることもなく、
人間観察を続けていた。
20時35分。ナツツの人、また何かを食べ始めた。
明日手術だというのに大丈夫だろうか。
一方で私は、足先が温かくなってきた。
術後は冷たかったのに。
「これが生きている証拠だな」と思う。

11 長い夜と白い月（9月3日・水曜日）

夜中0時34分。眠れずに窓の外を見ると、
西の空に月齢11.9の月が浮かんでいた。
まもなく沈むころだ。
個室の夜景と月の光——なかなか贅沢な時間だ。
朝食はご飯を半分、味噌汁に浸してようやく食べきった。
全体で7割ほど。喉の痛みはまだ残っていた。

12 退院—成城石井のチーズ（9月4日・木曜日）

退院日。午前10時。
前回の入院では手続きに時間がかかり、玄関を出たのは11時過ぎだった。
今回もそのつもりでいたら、9時過ぎに看護師がやって来て、
「今日退院ですよね？」と確認。
あわてて私服に着替えた。
半袖・半ズボン・アームカバー・スパッツ。外は真夏の陽射し。
妻とは11時に病棟で待ち合わせだったが、
会計や地域連携センターでの手続きが早く終わり、
すれ違いに。LINEで無事に合流できた。

術後のケアは地元・労災病院の循環器科で受けることになった。

「もう再々の入院はごめんだ」と思いつつ、

改修中の大学病院を後にした。

帰り道、地下街の成城石井に寄って、

800円もするチーズを奮発して買った。

普段なら手を出さない値段だが、

退院祝いだと思えば安いものだ。

地下鉄と名鉄を乗り継いで帰宅したのは正午近く。

そのチーズは大事に少しずつ食べたが、

結局、もったいながって冷蔵庫に置きすぎ、

カビを生やしてしまった。

……人生、思いどおりにはいかない。

でも、心臓は元気に動いている。